

第15部会

馬を七回引き廻す儀礼があつた。この神馬牽廻の儀礼は、年中行事の重要な節目に行われたと考えられる。

以上、聞得大君の神馬について考えると、御新下りの一部には、神馬を神に捧げる儀礼、あるいはその意味の神事が含まれていた可能性は高いと思われる。聞得大君が美しく飾られた白馬に乗ることはすなわち「琉球国最高の神の発現」を意味したのではないか。白馬誕生が大君の御代替りを想わせたのは、御新下りに、知念産の生命新たな馬を奉納する風習があつたとも考えられよう。とすると、聞得大君の神馬は、御新下り儀礼において神に献じられた靈験あらたかな白馬であり、その使命は、大君とともに琉球国神事に生涯を尽くすことであつた、という見方も可能ではないか。

戦後沖繩の火葬

——那覇若狭町、辻原の墓地整理をめぐって——

加藤 正春

戦後沖繩の火葬の状況については、米軍統治下の資料が公表されておらず、よくわからない点が多い。一九五六年に刊行された『真和志市誌』に一九五四の火葬率にかかわる関連資料が掲載されており、それから推定される同年の同市の火葬率は約五八％である。真和志市は今日の那覇市域の一部であり、この推定は、当時の那覇市域の火葬率が比較的高かつたことを示唆

している。那覇市域では一九四八年二月に戦前の仲毛葬儀社の伝統を継承する那覇葬祭組合が葬祭業をはじめたが、一九五五年二月には沖繩公益社が、火葬葬儀に特化したかのような葬儀社の営業を開始している。これは、当時の那覇市域の火葬率の高さを背景にしたものであろう。

那覇市域の火葬率の高さを導いた要因はいくつものものがあると思われるが、その一つとして、一九五一年から行われた那覇市若狭町、辻原の墓地整理事業をあげることができる。那覇の若狭、辻原の墓地群は沖繩を代表する墓地として戦前から有名であつたが、一九五一年に米軍の軍命を受けて、那覇市都市計画課がその撤去事業を開始したのである。米軍の意図は、両墓地の土を掘削し、その土を用いて泊港護岸の埋立・整備を行うことであつたようである。

事業は、まず墓地所有者の協力を得て、墓内の骨の火葬を行うことからはじまった。両墓地の墓の筆数は千七百余筆、実際の墓地数はこれよりも多かつたというが、その実数は役所も把握していなかつたようである。市は新聞に公告を出して所有者を探し、その所有者たちとの協議のもとに一斉火葬の手順を決定していった。一連の過程は逐次新聞（うるま新報および沖繩タイムス）が報道しているが、それによれば、人々は市役所が指定した日に、自家の墓内の骨をまとめて臨時火葬場（若狭町、辻原にそれぞれ一カ所ずつ設けられた）に運び、そこで市の職員に火葬してもらつたようである。その骨灰は市が提供した骨壺にいれ、自家の新墓の用意のない者は、市が設置した臨時納骨場（奥武山世持神社内）に安置したのである。火葬は五

月からはじまり八月に終了した。その後、両墓地は撤去され、泊港が整備されて、掘削された両墓地の跡地には新しい街が生みだされた。

一九五四年一〇月一二日の琉球新報は「那覇都市計画四年の歩み」と題された記事を載せ、この墓地整理のことを次のように記している。「△墓地整理事業Ⅱ辻、若狭町の墓地整理事業を五一年五月三日開始し八月一〇日に遺骨の再火葬を終了、遺骨は奥武山公園内の仮安置所に納骨した、墓の筆数一、七一二筆、仮安置所に納骨せる所有者一、一一八人、費用六四六、〇〇〇円。」〔縮刷版琉球新報第二〇巻〕不二出版〕

円はB円である。火葬に要した日数はおよそ三カ月であった。最初の告知が那覇市の「急告」として新報、タイムスの両紙面に掲載されたのは一九五一年一月二五日であるから、それから数えても、火葬事業の全体は六カ月半程のできごとである。いかに急激に事業が行われたかがわかるが、この一斉火葬事業の影響は大きいと思われる、那覇市域の人々に近い将来の火葬の必然を認識させたと考えられる。一九五〇年代半ばの那覇市域の火葬率の高さには、この事業の執行がその要因の一つとしてあげられるものと思われる。

里修験と陰陽道

——新出の『篋篋』の分析を中心に——

小池 淳 一

前近代における東北日本の修験の活動範囲は広く、その影響は多岐にわたる。このことは地域宗教史、民俗信仰の両面で重要な問題をはらんでいる。陰陽道との関わりについて、すでに宮家準は「修験道と陰陽道」〔修験道と日本宗教〕一九九六〕において修験道書にみられる陰陽道の要素を中心とする分析をおこなっている。また近世会津の修験については藤田定興『近世修験道の地域的展開』(一九九六)をはじめとする多角的検討がなされている。ここで取り上げる只見の吉祥院については筆者も「民俗知とは何か」(高埜・澤編『近世の宗教と社会3・民衆の〈知〉と宗教』二〇〇八)で若干の検討をおこなった。ここでは、以上の先行研究をふまえて、さらに南会津の修験の活動実態を探るために只見吉祥院に焦点をすえ、同家に伝来した『篋篋傳』の内容検討を試みたい。

近世の会津では本山派先達の南岳院が全体を統括し、現在の只見町域の修験の中では文政〜弘化年間、檀戸に居住した龍(瀧)蔵院が上通で、只見の吉祥院、文珠院は中通であった。五十嵐家の当主、英氏がまとめられた『不動尊と海老作本家』(二〇〇八、自刊)によると吉祥院は七代の行本から没年が判明し、十四代賢隆の時に明治維新を迎え、神職に転じ、五十嵐